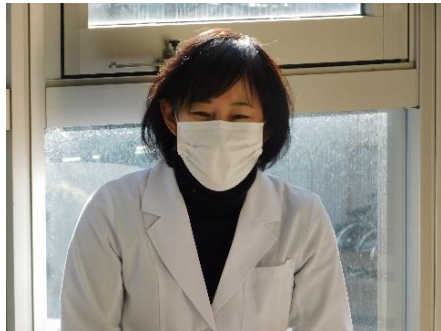




柴田先生に聞く SDGs 関連インタビュー第6弾 (2021年2月3日朝取材)



「陸の豊かさを守ろう」 私たち人間も関わっている 生物多様性について考える



インタビュー：M1A 神足佳音・M2B 菅野柚希・平山かな・藤原萌衣

神足：生物を教えておられる柴田先生は自然のことをたくさん知っておられると思います。最近も環境汚染、山火事の自然発火など、自然や環境についてのニュースが多くありますが先生はSDGsの15番の目標「陸の豊かさを守ろう」について何か思うことはありますか？

柴田先生：自然発火のことは私も調べて異常気象に原因があるというのを知りました。乾燥や高温などにより葉っぱの摩擦で火が起こって自然と山火事になってしまうようです。異常気象というのは人間の活動に原因があるのでやっぱり私たち人間が関わっているのだなあと思いました。

陸の豊かさを守ることは海の豊かさを守ることにつながるので、陸と海の生き物を守ることに繋がっていくんだと感じています。

神足さんは小学生の時に社会の授業で土の栄養分が海に流れ出すというのを習ったことがありますか？たくさん肥料を使ったら、その肥料が雨と一緒に海に流れていって海の富栄養化につながるのか。陸と海はつながっているということを理解することが大事ですね。

神足：では、もし実際に山火事が起きたら私たちはどうすればいいですか？

柴田先生：逃げようか(笑)。そもそも「山」って身近？家の周りに山はありますか？

菅野・藤原：身近です。家の近くに山があります。

柴田先生：そうですか！神足さんは？ **神足：**私は家の近くに海はあります。

柴田先生：そうかー！じゃあ家の近くに山がある人たちは山で遊んだことある？

菅野・藤原：あります。

柴田先生：そうか。山が近くにある人は今の時代でも遊ぶんですね。山の火事が起こったら……規模が大きくて火が広がっていくのであれば私たちの力では消火はできないと思います。オーストラリアの山火事は2019年9月から2020年2月まで続くという本当に私たちの想像を超えるものでしたね。だからやっぱり山火事が起こったら逃げるしかないね。

神足：では、生き物を守るために私たちに知っておいて欲しい知識はありますか？

柴田先生：それでは「生物多様性」ということばは聞いたことはありますか？



神足：はい、あります。

柴田先生：じゃあ「生物多様性」って何ですか？と聞かれたら神足さんは何て答える？

神足：なんか……国語の授業で勉強したんですけど、1つの島に生き物が2種類いたとして、その1種が生き物の数のほとんどを占めていたらバランスが取れないから、それは「生物多様性」っていえるのかという話を聞いて、やはり生き物の数が多様性には大事なんじゃないかなって思っています。

柴田先生：そうやね。多くの人が「生物多様性」って聞いていろんな種類の生物がいることって思うのだけど、バランスが大事で、特定の種類の生物が多くてほかの生物は少ない、けれど種類は多いというのは「生物多様性が大きい」とは言えないです。食べる食べられるの関係で全ての生き物の数は一緒とは言えないけど、いろんな種類の生物がバランスよく、絶滅につながることなく生息できている場合、生物多様性は大きいといえます。

それからいろいろな生物が地球上で生活していくためには様々な生態系が必要と言えます。海、森、草原も必要だし、これらの様々な生態系があることが生物多様性につながっているんです。



それと高校で習う話なんだけど、同じ種類の生物でも、個体によって持っている遺伝子が様々であるというのも生物多様性につながります。ちょっと難しいけどね。だから「生物多様性」は3つのことが大事で、1つ目は遺伝的多様性、2つ目は種多様性、3つ目は生態系多様性です。この3つの生物多様性は私たち人間の活動で失われていくことがあるので、そこを理解しておかないと生き物を守ることはできないのだと思います。

神足：様々な知識を身につけることは自然保護にも必要ですね。やはり人間も生物多様性に関わっているという意識を持つことが本当に大切だと感じました。ありがとうございました。(記事編集：神足佳音)

賢明人語

突然ですが、質問です。あなたは何故、賢明女子学院に通っていますか。どうしてあなたは数ある中学校、高校の中からこの「女子校」である賢明を選びましたか。▼近年、少子化などの影響で全国の女子校の数は減少傾向にある。2020年度の文科省の調査によると、全国の高校の数は874校、そのうち女子校の数は289校。なんと全体の6%にも満たない。私たち賢明生は今や絶滅危惧種である。男女共同参画社会が謳われる現在、一見すると時代に逆行するようにも思われる男女別学制度ではあるが、本当にこのまま過去の文化として消えてしまってもいいのだろうか。▼子供は大人の姿を見て育つ。共学校において教室は社会の縮図である。いくら男女平等を教育したとしても、現代社会にジェンダー格差が蔓延るかぎりは、教室にもその空気が反映され続けるだろう。その一方、賢明の校舎の中で「私」は「私」でしかない。何せ女子しかいないのだから、「女子生徒の」などという余計なカテゴリーに分けられる必要がないのだ。普段の授業で、学校行事で、部活動で、どのように行動するか。それらは全て「私」の自由であり、そこに世間の常識は関係ない。「女子校」と聞いてどこか浮世離れた女子校園を連想する、というのは賢明生の間では定番の笑い話であるが、それもまた意味正しいのである。▼今後いつか、他校の共学女子たちと自分の知る学校生活との違和に悩むことがあるかもしれない。それでその時、共学女子に擬態しようとはどうか思わないでほしい。男女別学とは、時代遅れの制度に見えて実はジェンダー平等への最先端の教育なのだ。私たちは幸運にもその教育を受ける機会に恵まれた。そのことについて感謝の念を抱きつつ、絶滅危惧種の女子校生徒ライフを存分に楽しんでいきたいものである。(小西真楓)

“届けよう、服のチカラプロジェクト” 完結



株式会社ファーストリテイリング
・ UNHCR 駐日事務所
感謝状・マスクが届きました

今回本校が淳心学院と協力して取り組んだ“届けよう、服のチカラプロジェクト”。主催の（株）ファーストリテイリング様よりユニクロのエアリズムマスクが届きました。

このマスクは学校の備品として保管していきます。(3枚入り 100袋)

回収した服は国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の要請と協力に基づいて服を必要としている難民・避難民の子どもたちに送られます。

～服が届くまでの流れ アフリカのマラウイ～

- 服の収集 → 日本の倉庫に集められ、着られる服・着られない服に分別
- サイズや性別など種類ごとに段ボールに → 段ボールをビニールで包み、届けられるまでに雨に濡れたり、汚れたりしないように船に積む
- ファーストリテイリングの従業員がアフリカ南東部のマラウイに訪問、日本から片道およそ 30 時間。



～2020 年度送付先 “The warm heart of Africa（アフリカの温かい心）”の愛称を持つマラウイ～

設立されて 25 年以上にもなるザレカ難民キャンプ。約 4 万 5 千人以上の難民が暮らしています。コンゴ民主共和国出身者が 60% を占め、次いでブルンジ、ルワンダ、ソマリアと続く。公共施設やインフラは十分に整備されていません。女性・子供が多く、特に子どもの成長に合わせてすぐ必要になるはずの服は 1 着しか手元にない人もいます。

今回日本からマラウイに送られたのはおよそ 25 万着の衣類

- 1 人あたり トップス 4 枚、ボトムス 1 枚の計 5 着を配布。平等に配布するための作業がとても大変
- 難民の方々の境遇は 100 人いたら 100 通りあり、人それぞれです。

～ファーストリテイリングの従業員の方より（一部省略）～

はじめは緊張した表情でも、服を渡すとうれしそうにポーズをとってくれたり、従業員が手渡した服が自分の娘のものだと伝えると、「なら私たちはファミリーね！」と一緒に喜んでくれたり。現地で出会った服にまつわるこうしたエピソードも“服のチカラ”と共に今後も届け続けていきたいと思っています。

命を守る。おしゃれを楽しむ。学校に行く機会になる。人が人らしく生きる……。

そんなたくさんの“服のチカラ”を、

今年も難民・避難民の子どもたちに届けることができました。

これからもこの経験を活かし、誰かのために、社会のために自分でできることを続けていきたいと思います。プロジェクトに参加していただいたみなさん、本当にありがとうございました！

「2020 年度 届けよう、服のチカラプロジェクト」フォトレポートより抜粋

SDGsHeadLine 2020 年度は今月号が最終号

M2B 平山かな

新聞班 記者よりご挨拶

新聞をつくるうえで大切にすることは「どんな新聞にすれば読みやすくなるか」でした。その為にもインタビューの記事をあえて会話文のように書いたり、写真を多く入れたりしました。この新聞を読んで 1 人でも多くの人に SDGs や Be Leaders の活動に関心を持って頂けると嬉しいです。この SDGs HeadLine を読んで下さった皆様、インタビューに協力して下さった皆様、本当にありがとうございました。

M2B 藤原 萌衣

去年は知らなかったことが多々ありましたが、この新聞発行を通して沢山の事を知ることができました。この新聞づくりに関わってよかったです。新聞を発行するときに、お忙しい中インタビューなど快く引き受けて下さった先生方、生徒の皆さん、本当にありがとうございました。

M2B 菅野 柚希

取材で興味深い話を聞くことができとても楽しかったです。新聞を通してたくさんの人と繋がることができました。初めての後輩と新聞を協力し、つくることができてよかったです。1 年間ご愛読ありがとうございました。

M1A 神足 佳音

いそがしく大変でしたが勉強になる事しかなく、たくさんの先生や上級生に取材をさせて頂きとても良い経験になりました。私たちが新聞の記事に掲載した内容を色々な方に知ってもらい考えて行動してほしいと思います。新聞発行にご協力いただきありがとうございました。



今年度新聞記者を務めた 4 名です。



新型コロナウイルスと SDGs

2020 年度は世界的にも新型コロナウイルスのパンデミック（世界的流行）により日常生活が失われました。その影響は計り知れず、世界の教育、健康、生活水準を総合した尺度である人間開発指数が今年、測定を開始した 1990 年以来、初めて減少する可能性があると予測しています（UNDP・国連開発計画）。SDGs についても特に「解決遅延」とされる目標は「1 貧困をなくそう」「2 飢餓をゼロに」「3 全ての人に健康と福祉を」「10 人と国の不平等をなくそう」「12 つくる責任つかう責任」「16 平和と公正を全ての人に」があげられています。この危機に対し世界は、私たちはどのような方向性を持って進んでいくべきでしょうか。問題が大きすぎて個人一人の行動は何も影響（貢献）がないように思いがちです。9 月より 6 号を発行することができた「SDGsHeadLine」。インタビューや取材記事の内容を通してやはり大きな問題こそ一人ひとりの小さな行動が大切であると気づかされたように思います。まずは関心を持つ、自分の事として考える、そして小さくてもとりあえず一歩踏み出す、それが現代社会において必要です。SDGs は 2030 年の達成目標です。その頃の世界は更なる技術の進歩、グローバル化の進展、また新たな問題の発生が容易に予想されます。その時の社会の主役となる世代がまずは第一歩を踏み出す小さなきっかけにこの新聞がなってくれることを期待してやみません。その願いと共に来年度も発行継続、記者募集。